

## 私の研究と3・11について：十五年戦争と震災

神子島 健

### はじめに

私は日本社会における十五年戦争の意味を、特にその戦争を描いた小説の分析を通して研究している（といっても、対象を小説に限定しているわけではないが）。こうした研究において“十五年戦争を経て日本社会がどう変わったのか”というテーマは重要なものであるが、十五年戦争の意味が巨大であればあるほど（十五年戦争という呼称および定義に批判があることも含めて）このような大雑把な問いの立て方自体、様々な問題を隠蔽しかねない。

それはどういうことか。“十五年戦争を経て日本社会がどう変わったのか”を考える際に、この戦争に直接起因するが、戦争終結からしばらくの時間を経て出てきた問題、例えば各交戦国との講和を考えてみよう。戦争の法的な終結を意味するはずの講和に、既に戦後という時代の冷戦が露骨なまでに影響を及ぼしており、どこが戦争の終わりかを一義的に決め難いのである。更には植民地支配の清算として位置づけられるべき朝鮮半島の両国家との国交正常化をどう位置づけるのかともなれば、まだ朝鮮民主主義人民共和国とは国交すらないのが現状であり、清算などと言える段階ではない。

2011年3月11日を起点とした震災とその後の経験を戦争と比べるのは、色々な意味で適切でないかもしれないが、十五年戦争と同じように“3・11を経て日本社会がどう変わったのか”という問いを単純な形で提出することを拒む巨大にして込み入った社会的経験である、とは言

えると思う。復興が現在進行中であり、多くの被災者が仮設住宅などで暮らし、平穏な生活を取り戻すに至っていないとも言える状況で、もしかしたらまだ発することが適切ではない問いなものかもしれない。以下の文章は、私自身の研究と関わらせながら、私にとっての3・11とその後を考察したエッセイである。また、このエッセイ企画の企画者としてその意図についても触れておいた。

### 焼け跡の連想

巨大地震の発生直後、津波で根こそぎさらわれた太平洋沿岸の街並みをテレビや報道写真で目にする<sup>1</sup>ことで、少なからぬ人々が自分では見たことのない空襲による焼野原を連想したようだ（中には実体験としての焼野原と重ねた人もいただろう）。私も連想した一人である。私の場合、それに加えて福島第一原発の過酷事故による放射性物質の拡散で多くの人々が福島からできるだけ遠く離れていく状況を見て、すぐに戦時期の疎開をイメージし、東京で食料などの買いだめが起きると、流通の滞った戦争末期や敗戦直後の状況をなんとなくイメージした（もともと、買いだめの方はオイルショック時のパニックの方がより近い現象だろう）。

2012年8月に上梓した拙著『戦場へ行く、戦場へ還る』（新曜社）の「あとがき」に書いたように、私には昔から1945年という時期を一つの基準としてモノゴトを考える癖があり、ましてや今ではその戦争について研究しているのだ

から、私がこうした連想をすること自体は不思議ではないだろう。だが、津波でさらわれた沿岸部と焼野原を結びつけた人が少なからずいたということは、阪神・淡路大震災などの例外はあるにせよ、日本社会に生きる多くの人々にとって、戦争末期の空襲がカタストロフのイメージとして今もって大きな位置を占めていると言える。ちなみにここでの焼野原はおそらく通常の空襲であって、原爆の焼野原と明瞭に結びつけた例を見た記憶はない。もっとも、ヒロシマ・ナガサキという象徴はもちろん、原発事故による被曝という問題に結び付けられて語られることが多いわけだが。

空襲の焼け跡は、黒く焦げた光景が広がり、焼け焦げた建物の匂いに満ちているものであろうか。津波で破壊された沿岸の町のいくつかには、湿った建物の残骸と、ヘドロの匂いが広がっていた。あるいは根こそぎ破壊されたためにかえってガレキの片付けが早く進み、ヘドロの匂いなどないところもあった。私は2011年8月下旬、岩手県中部の沿岸地域に赴いた。ガレキが片付いた町であっても、建物の基礎のコンクリートだけは残っているためそこにあった住宅の輪郭が想像され、そこでは巨大な破壊力のもたらすものに対する自分自身の感受性が揺さぶられた。

特にここまで書いてきたことと関連して言えば、次のような経験が印象的だった。焼け跡と津波による破壊のつながりはあくまで“連想”でしかなく、基本的な違いは当然予想されたものであったのだが、流されてアルミ缶のようにべしゃんこになった自動車が何十台も焼け焦げた姿でガレキの集積場に置いてあるのを見て、津波被害のイメージが狂った気がした。震災当日にテレビで見えていたはずの津波によって起こる火災について、この時はほとんど私の記憶から飛んでいたと言わざるをえない<sup>(1)</sup>。戦時期と震災を単なる連想によってつなげていたはずが、

現前の被災地の光景を前につながり強化されてしまった感覚であった。もっとも、このことが長期的に見て、私自身にとって何（か）をもたらずのか現時点ではわからない。

「現時点ではわからない」というのは、無責任な書きぶりであるが、このエッセイ企画そのものが、分からなさを含み込んだものである。少し脱線するが、そのことの意味合いを今回の企画者としてここで少し書いておきたい。

## 今回のエッセイ企画に関して

2011年4月上旬、関連社会科学に入学してきた大学院生たちの歓迎会に際して、そういう場あまり顔を出さなくなった博士課程の上の学年の知人たちを誘うに当たり、下記のようなメールを送った（抜粋：一部表現を変えた）。

今回の震災に関して、どう感じ、どう考えているかを話す機会がなかなかないので、そんな機会がほしいというのが正直なところでもあります。Kさんにたまたま昨日お会いして話していて、社会科学を研究している我々にとっての根底が問われるような大きな問題を含んでいるのが今回の震災だという点でお互いに合意しました。というと、堅い言い方になりますが、この震災って結局何なんだ？というまだまだ答えのない問いについて話す機会となればと思っています。

実際に都合が合うかどうかは別として、メールを送った知人たちの反応は良かった。つまり、同じようなことを考えていたわけだ。震災からひと月もたっていない時点であったので、頻繁に続く余震、どうなるか事態のわからない原発事故、まだまだ片づけも進まない被災地と、震災の意味を手探りしている状況でしかなかった。そしてそうしたことを話し合う機会というのは、

かなり少ないものであった。

この時代を生きる一市民として、そしてその中で社会科学系の研究を行う一人として、震災について考えざるを得ないということはほとんど自明であり、問題は具体的にどう考えていくのかにあると思われた。新入生の入ってくる時期であるから、初対面の挨拶でも“あの日”どうしていたかといった話題は当然出た。が、時間の推移とともに、どうも“自明”と思う人間は必ずしも多くないような感じもしてきた。マスメディアにおける震災の扱いが減少していくのに合わせるように、表向き3・11関連の話題は院生の間でも減少していったのである。

世間では一時期よりボランティアが減っているとはいえ、長期的な支援体制を構築しているグループはたくさんあるし、そういう活動に参加している知人も大学外には多い。駒場の内側でも院生より教員の方が、震災に関連する研究会や講演などを積極的に企画している。むろん、すでに専門家としての立場を確立している教員が、その専門の観点から震災について発言することは困難でないし、場合によってはその発言が評価を受ける。対してこれから専門を固めようと必死に自らの眼前の課題に取り組んでいる大学院生が、自分にとってアカデミックな業績と関わりのない場合、震災について何らかの取り組みをするのが困難であることはわかる。ただその上で、自分の現状では取り組みを断念せざるを得ないということと、取り組めないという現状に居直ること、さらには居直ってすらおらず最初から自分の研究には全く関係のないこととして視野に入っていないということは意味が異なることは確認しておこう。

元から関心がない、ということは（例えば原発への関心が東日本よりも西日本ではかなり低いように）一般論としてはあり得るとしても、現在の日本で社会科学の研究に携わりながら震災の問題を完全に無視するというのも逆にお

かしなことではないだろうか。少なくとも私は、震災後の経験上、以下のような意味においてそう感じた。

一つは、“がんばろうニッポン”や“絆”という言葉でマスメディアや政府などが一体感を作り出そうとした動きに関してである。被災者の中には家族や隣人、故郷との絆を断たれた人がいる中で、絆といったことばがおそらくは被災地以外の人々をまとめるために安易に持ち出された。そして被災によって分断が起りかねない状況を表面上繕うかのように“ニッポン”という単位が持ち出される。マスコミも含めた巨大な力によってつくられるこうした言説に、社会学者としてどのようなスタンスを取るのかが問われるだろう。

もう一つは、一般市民から見た、社会についての専門家という立場としてである。つまり、社会に関する何がしかの専門家として、あんたは今起きている一連の問題をどのように捉えているのか、という問いかけがあるならば（私は何度とそういう問いを受けた）、それに対して何らかの言葉を発する必要があるだろう。震災直後の混乱的な状況や、あるいはその後の復興における様々な問題、あるいは原発に関わること、今後の社会の在り方など、様々な問題を含み込み、これに対して何も言えなければ社会について研究しているとおいそれとは言えないのではないだろうか、ということだ。

このようなテーマについて、院生の間でほとんど話す機会がないというのはしかし、単に関心があるか否かの問題だけでなく、関心があっても専門以外の話を共有しにくいといった理由による可能性もある。であるならば、そうした話題を共有する一つのきっかけとして（研究としてとなるとハードルが高いので）、「エッセイ」という形で思っていることを出してもらって、それについて意見をぶつけ合うことなら可能ではないかと思い、こうした企画を考えてみ

たのである。あわよくば、それを何年後かに振り返った時に、社会科学の院生（や若手研究者）が震災を自分の研究との関連でどう考えていたのかというドキュメントとして少しでも意味が出れば、とも思っているところである。

### 自分の研究領域から考えてみる

さて、話を戻して、私自身の研究との関わりについてもう少し書いておこう。私は神子島[2012b]で、戦死者の記憶と今回の震災の死者の記憶を比較しながら論じたことがある。多数の死者の出た地域が一部の沿岸地域に集中している今回の震災では、親しい人を失った人の抱える“不在”という感覚が、他地域に住むほとんどの人には見えてすらいないという意味で「二重の不在」とでも呼ぶべき問題があることを、戦死者の記憶が家族にとって消し難い“不在感”を生んだことと結びつけてここでは論じた。戦争による破壊とそれが必然的に伴う大量の死者がもたらした問題が、震災による大量の破壊によってもたらされるであろう問題を示唆してくれる面があるわけだ。それが人災であろうが天災であろうが、天寿を全うできない形で突然親しい人を失った喪失感は何らかの形でやってくるからだ。

戦争のもたらしたはずの深い傷を、それが被害の経験であれ加害の経験であれ、なかったかのように極力やり過ぎることが、あるレベルにおいては可能だったように（神子島[2012a:第5章]）、震災のもたらしたはずの深い傷をもあたかもなかったかのようにすることは、一応可能であろう。ちなみに「あるレベル」と限定したのは、戦争の場合であれば、そうやって思い出したいくない過去の記憶を閉ざすことで、日常的な感情が鈍磨していったり、あるいは思い出そうとする人との対立が顕在化したりするので、完全にやり過ぎせるとは限らないからである。震災を考えてみれば、例えば原発事故で故郷を

喪失した、いわば根こぎとも言える経験をした人にとって、または津波などで肉親を亡くした人にとって、そのつらさを真にやり過ぎることが可能かはわからないし、可能だとしてそれが望ましいかどうかはわからない。こうしたことは、おそらく将来において震災の記憶のもたらす地域的な断絶につながっていくことと思われる。

東日本大震災によって家を失ったのは、原発事故で住めなくなった人にとどまらない。津波で集落ごと流され仮設住宅などで生活し、元の場所に戻れぬ上に移転も見通しが立たないような人もまだまだ大勢いる。生活基盤を失い、なんとか仕事を再開し、あるいは新しく見つけた場合でも、一時的な雇用や“仮設商店街”での営業だったりすることもあるわけで、「被災者」という立場が半ば固定化してしまっている人も多い。被災地の復旧・復興がなかなか進まないにもかかわらず、19兆円と言われる復興予算の中で、常識的に考えて「復興」には関係のない事業に使われているものがかなりあることが、NHKスペシャル「追跡 復興予算19兆円」（2012年9月9日）や各種新聞報道で明らかになっている。

こうした事象はもちろん政策論や政策への民意の反映、あるいは復興という緊急度の高い目的において柔軟な対応をどのような形で実現するのかといった点など、様々な視点から議論するのかもしれない。ここでは私自身の研究領域と関連付けて次の点を考えてみたい。高橋哲哉[2005:29以下]は、近代日本の植民地支配や侵略戦争によって被害を受けた人々の呼びかけに対する応答可能性（responsibility）として戦後責任を定義した。これは被害当事者を出発点にして責任を考えるものであり、加害当事者以外の人間、いかなれば直接的な戦争責任を持たない戦後生まれの世代などにも責任がありうることを意味する。この責任は原理的には国籍とすら無関係である、



ただし日本政府の戦後の不作為などに対する政治的責任において、日本国籍保持者にはより大きな責任があると高橋[2005:45-50]は書く。ここでの被害者の呼びかけというのは、“こうした被害事実があった”ということを訴える人々の声であるが、必ずしも実際に声を出せる、あるいは出した人々だけではなく、被害を受けた過程で殺された人や、抗議の声を上げぬままに亡くなってしまった人の「ありえた声」も含んでいる。このありえた声も含めた呼びかけというのは、戦争や植民地支配に関わる直接的な行為への異議申し立てに限らず、戦後における加害事実の隠蔽や歪曲、ないし被害者の尊厳を傷つけることへの異議申し立ても含んでいる。

この呼びかけを震災に援用して考えてみるならば、被災した方々の思いを受け止め、更にできるならば彼らの状況を少しでも前進させるための何かをするという意味での“応答”は、天災に対しての責任を持たない人間にとっても行うのが望ましいことだろう。もちろん津波への想定や避難計画の甘さといった政策レベルでの失敗や不作為という人為の結果もたらされた被害への責任はそれとして別に考慮されなければならない。

こうしたことは別に応答可能性など持ち出さなくてもできそうな議論でもあるが、被災して苦しんでいる人がおり、そのことを出発点に考えることで問題をシンプルに捉えられる点で意義がある。この単純なことは更に、呼びかけということばを媒介にして冷静に考えると、東京で暮らしている私自身にとって（直接的な被害を免れた地域にいる少なからぬ人にも）おそらく、被災した方々の思い、呼びかけというものをキチンとした形で知ることのできる機会がどれほど少ないのかを浮き彫りにするのではないか。ここで言いたいのは彼らの思いや感情を正確に知るとか真に理解するということが原理的に困難であるといったこと以前の話である。ま

た、震災当初のトラウマ的な体験を語りにくいといった問題ですらない。現在どのようなことを彼らが求め、必要としているのかといったことすら、簡単には情報が入って来ないのである。もちろんそうした思いを発信している人はいるので、努力して情報を集めればある程度のことを知ることができるが。

冒頭で、“3・11を経て日本社会がどう変わったのか”という問いを単純に提出することが難しいことを指摘した。その難しさの根底にはそういう問いを抱いている私たちが“3・11を経て日本社会がどう変わるか”の当事者であり、つまるところ“3・11を経て私（あなた）はどう変わろうとするのか”という問題が存在している。

“3・11”を災害や原子力に関わる点に焦点を当てて捉えた時、それは次なる震災に備えてこの社会をどういう方向へと進めるのかという将来像と切り離せない。“次なる震災”の被害を極力抑える社会を創ることは、結局のところ今まだ困難な状況にある人々の困難を取り除く努力をし、その経験を積み重ねた先にしかあり得ない。それ抜き議論はつまり被災当事者を実質的に無視するか切り捨てることを意味する。眼前の被災者を救う気のない社会に、次なる被災者を救うことはできまい。被災者の呼びかけに真摯に応答することなしに、災害に強い社会など作り得ないのだ。

だが、3・11が社会学者個々人にもたらず（もたらした）もの、ということであれば、もっと別なものが色々出てくるかもしれない。私がガレキの集積場で見た光景の意味のように、自分自身が揺さぶられた何か、それが「現時点ではわからない」ものであっても、書き留めておく意味があるならば、そういうものでもよいと思う。それも含めてのエッセイ企画である。今後しばらく続けられれば、と思う。

## 註

1. 気仙沼や石巻などでの大規模な火災のメカニズムについては、「巨大津波 知られざる脅威」(NHKスペシャル2011年9月11日)、また、海水に浸かった自動車から発火するケースも多いということ、 「津波火災 知られざる脅威」(NHK、クローズアップ現代2012年9月3日)にて知った。

## 文献

神子島健 (2012a)『戦場へ征く、戦場から還る』新曜社.

神子島健 (2012b)「二重の不在 一戦後と3・11後の死者について一」『批評研究』論創社、1 : 189-210.

高橋哲哉 (2005)『戦後責任論』講談社学術文庫.